W3J

本科１期６月度

解答

Ｚ会東大進学教室

東大世界史

8章　絶対王政Ⅱ

添削課題

解答例

(A)　事件名はアンボイナ事件。オランダがアンボイナ島からイギリス勢力を駆逐して香辛料貿易を独占，この地の支配権を確立した。イギリスはアジアにおける活動の拠点をインドに移していった。(87字)

(B)　目的は，植民地・ヨーロッパ諸国との中継貿易からオランダを排除し，国内の貿易商人を保護すること。結果は，オランダの中継貿易に打撃を与え，イギリス＝オランダ戦争を引き起こしたこと。(88字)

(C)　イギリスは，新大陸におけるフレンチ＝インディアン戦争でフランスに勝利し，インドでは，フランスと結んだベンガル太守をプラッシーで破り，カーナティック戦争でもフランスに勝利した。1763年のパリ条約で，新大陸のカナダ・ルイジアナとインドにおける勢力圏をフランスは失い，イギリスの両地域における覇権が確立した。(150字)

解説

《17～18世紀の覇権争い》

東京大学の中論述問題としては，設問の要求がストレートに示されており，書きやすいものと言えるだろう。論述の対象となっている事項は，すべて基本的なものであり，その内容を説明することは容易であろう。そうであるがゆえに，ただいたずらに「知っていること」を羅列するのではなく，設問が要求していることをしっかりと把握して，「求められていること」をまとめていってほしい。

(A)

この設問は，「抗争を示す事件」を明記したうえで，その事件の「結果」を述べよというものである。解答を作成する際には，事件の経緯は要求されていないのだから触れることなく，あくまで結果についてのみ指摘するよう心掛けてほしい。また，この設問のように，論述の中で単答問題の答えを要求している場合，解答例に示したように，まず，その解答を提示した上で，文章をまとめることをお勧めする。こうしておけば，後半の文章に万が一誤りが含まれてしまった場合でも，正しい事件名を提示できていれば，その部分に関しては加点対象となるからである。

さて，この設問の内容に合致する事件とは，1623年に発生した「アンボイナ事件」である。この事件は，香辛料（クローブなど）を産出する，モルッカ諸島南部のアンボイナ島に進出したオランダ，イギリスの両東インド会社の商館員が，その利権を争った結果，オランダの手によりイギリス商館員（イギリス人10人，日本人9人，ポルトガル人1人）が虐殺されたものである。当時，両国政府は，オランダ独立戦争の際に協力関係にあったことから，この地にお

ける利害の調整に積極的であったが，イギリスに先駆けてこの地に進出していたオランダの現地勢力は，この本国政府の方針に不満を持っていたため，この挙に及んだと考えられている。この事件によりイギリス勢力が一掃されたことから，オランダは香辛料貿易を独占し，現在のインドネシアにおける優位を確定させた。また，抗争に敗れたイギリスは，東南アジアへの進出を一時断念し，その活動拠点をインド，さらにはペルシア湾岸へと移していった。

(B)

この設問は，1651 年の航海法についてのものである。ここで求められているのはあくまで「目的と結果」である以上，法律の内容や制定に至った背景などは不要であることをしっかり認識してほしい。そのうえで，まず目的を確定させるために，航海法の内容に関して確認していこう。

1651 年に制定された航海法は，ピューリタン革命前後の混乱もあり，海外貿易においてオランダに遅れをとっていたロンドン商人たちに支持されて成立した。その内容は，イギリスに寄港することのできる船舶は，イギリス籍か輸送品の原産国籍のものに限定するというもので，“オランダ船を排除する”とは明記されていないが，当時の状況から判断すれば，明らかに「オランダの中継貿易を阻害するため」のものであった。さらに，このオランダの排除は取りも直さず，自国商人の保護につながっており，この２点が主たる目的となっている。一般に，前者のみを目的と考えているケースが多くみられるが，ただ単にオランダの中継貿易を妨害しただけでは，イギリス自体にメリットがあるとはいえず，自国の貿易活動を活性化することを含んではじめて意味がある点はしっかり意識しておいてほしいところである。

次にその結果であるが，オランダはアジア・北アメリカの産品をイギリスに輸出することができなくなり，大きな打撃を受け，イギリス政府に激しい抗議を行うこととなった。しかし，外交交渉による事態の打開がままならなかったことから，翌 1652 年，イギリス＝オランダ（英蘭）戦争が発生した。この戦争は３次にわたって展開したが，最終的にイギリスが勝利を収め，のちの海外発展の基盤を築くこととなる。

ここで注意してほしい点は，イギリス＝オランダ戦争に勝利したイギリスが，大西洋の制海権を掌握したこと，さらに植民地帝国建設の土台を築いたことなどは，あくまでこの「戦争の結果」であり，航海法から見た場合，結果ではなく影響に当たることである。重要な内容であり，かつ受験生にとっては必須のものであるがゆえに，設定を無視して影響に触れてしまいがちなので，気をつけて答案を作成してほしい。

(C)

この設問は，七年戦争期（1756 ～ 1763）におけるイギリス・フランスの植民地抗争についてのものである。七年戦争期ということから，フレンチ＝インディアン戦争（1755 ～ 1763）を思い起こすであろうが，ここでは「アジアでの抗争」の内容も求められている以上，インドにおけるイギリス・フランスの争いも忘れずに指摘しなければならない。また，求められているものは，「経緯と結果」であるので，抗争の原因や結果から導かれた影響などは省略し，純

粋に経過（発生・展開・結末）のみを示すようにしてほしい。

まず，北アメリカにおける状況であるが，ウィリアム王戦争（1689 ～ 1697）以来続いていた，イギリス・フランスの抗争の最終のものとしてフレンチ＝インディアン戦争が発生した。戦争名は，フランス軍にネイティヴ＝アメリカン（当時の呼称としては“インディアン”）が協力していたことに由来する。開戦当初はフランス側が優勢であったが，1757 年にウィリアム＝ピット（大ピット，フランス革命期に首相を務めた小ピットの父）が戦争指導者として安定政権を築くと，戦況はイギリス優位に転換していった。1759 年にイギリス軍がフランス領カナダの中心であるケベックを陥落させると，その勝利は動かぬ状況となった。

次に，インドにおける状況であるが，17 世紀後半以降，東南岸をめぐってイギリスとフランスは 3 次にわたるカーナティック戦争（カルナータカ戦争）を戦っていた。フランスのインド総督デュプレクス（1697 ～ 1763）が土着勢力と結んでイギリス軍を圧倒したが，戦費の増大を嫌った本国政府によって，1754 年に彼が召喚されると，イギリス東インド会社書記クライヴ（1725 ～ 1774）を中心に，イギリスが攻勢に転じた。このような中，イギリス東インド会社と，ベンガル地方王侯とフランスの連合軍が，カルカッタ（現コルカタ）北方のプラッシー平原で激突した。このプラッシーの戦い（1757）において，イギリスは連合軍の内部分裂を促して勝利し，ベンガル地方の支配権を確立した。この敗北を挽回するためにフランスが企てた第 3 次カーナティック戦争（1758 ～ 1761/63）においても，イギリスの優位は覆らず，東南岸の拠点ポンディシェリが陥落（1761）して，フランスの敗北が確定した。

これら一連の植民地抗争の講和として結ばれたのが，1763 年のパリ条約である。この条約により，北アメリカ大陸において，フランスはカナダ，ミシシッピ川以東のルイジアナをイギリスに，ミシシッピ川以西のルイジアナをスペインに割譲することとなり，インドにおいては，ポンディシェリ，シャンデルナゴルを除くすべての植民地を放棄した。その結果，両地域におけるイギリスの優位が確定し，植民地帝国への道を歩み出すことになる。

以上のような経過を 150 字以内にまとめるわけであるから，書き入れる内容をしっかり吟味し，過不足なく答案を作成しなければならない。このようなケースで心掛けてほしいことは，多少違和感はあるだろうが，記載する項目の定義や補足説明を思い切って省略する点である。例えば，「フレンチ＝インディアン戦争」に関しては，その名の由来やケベックの占領など，「プラッシーの戦い」に関しては，クライヴの活躍など，「カーナティック戦争」に関しては，ポンディシェリの陥落などは，すべて経過を示す際の補足にすぎないので省略する，ということである。ここで求められているものは，「抗争の発生」・「戦闘の経過と勝敗」・「結末としての戦後の処理」なのであるから，“切り口上”に思える表現であっても，必要なもののみを書き入れる意識を強く持ってほしい。

解答例は，一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば，千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

９章　絶対王政Ⅲ

添削課題

解答例

16 世紀にオーストリアを拠点とするハプスブルク家の支配はスペインにも及び，スペイン王カルロス１世は神聖ローマ皇帝カール５世となった。そのハプスブルク家とフランスを支配するヴァロワ家は，イタリア戦争以後，対立を続けた。ユグノー戦争におけるスペインの介入と三十年戦争におけるフランスの介入で対立は頂点に達した。ユグノー戦争後に成立したフランスのブルボン朝は，ルイ 14 世のもとでスペイン継承戦争の講和条約であるユトレヒト条約において，スペインにも支配を広げていった。しかし，プロイセンとの対立をかかえるオーストリアと，イギリスとの対立をかかえるフランスは，七年戦争に際して外交革命と呼ばれる和解を行った。(297 字)

解説

《スペイン・フランス・オーストリア》

この問題は本来，指定語句ではなく「参考語句」であった。その語句の中からハプスブルク家とブルボン家という語句を省いて指定語句とした。ほとんど改題とはいえないだろう。さて，国際関係を述べていく論述問題は近代史になると当然増えてくる。その時に注意したいのは国の名前を何度も使っているうちに字数があっという間になくなっていくことだ。字数に対する脅えからなんとか字数を稼ごうと考えているのではいけない。

この出題は考えていくうちにひとつの疑問に突き当たる。それはオーストリアという「国」についてのことだ。これがひとつの「国」として解釈できるのは三十年戦争後のウェストファリア条約以降である。もちろん神聖ローマ皇帝の称号はナポレオンが神聖ローマ帝国を解体させる 1806 年まで使われていて，そこからオーストリア皇帝と正式に称することは知っているだろうか（もっと厳密にいえばオーストリア皇帝を名乗るのは 1804 年のことである)。結局，この問題でいわれているところのオーストリアとは，ハプスブルク家の領地のことを指しているのであろう。なぜこんなことを考えたのかというと，16 世紀からというとハプスブルク家は神聖ローマ皇帝とスペイン王を兼ねていた（カール５世＝カルロス１世のこと）とはいうが，決してオーストリア皇帝とスペイン王を兼ねていたとはいわないからだ。したがって解答例もこの点を考慮してかなり苦労したものになった。大きな流れを述べておく。スペインと神聖ローマ帝国を支配していたハプスブルク家はフランスと対立していた。スペイン継承戦争においてフランスを支配するブルボン家の支配がスペインにも及ぶ。最後は七年戦争直前にブルボン家とハプスブルク家が外交革命と呼ばれる和解を行う。ということになるのだろう。とするとこの問題は三国の動向というより，ハプスブルク家とフランスを支配していたヴァロワ家・ブルボン家の対立ということをしっかり表現していかなければならないことに気づくだろう。

フランスを支配していたのがブルボン家だけでなく，前半がヴァロワ家であることも解答例

を書くときに苦労したところだ。冒頭に「オーストリアを拠点とする」と書いたことで，神聖ローマ帝国が出てこなくなっても，ハプスブルク家がオーストリアを支配していたことがわかるだろうということで書いたのだが，実際にはそういうことを書かなくても出題者は考慮してくれるだろう。ここでは，慎重を期した場合の解答例を示した。

解答例は，一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば，千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

１０章　イスラーム世界とヨーロッパ

添削課題

解答例

13 世紀末に小アジアに建設されたオスマン帝国は，バルカン半島へ進出し 1453 年にビザンツ帝国を滅ぼした。1517 年にマムルーク朝を滅ぼし，サファヴィー朝からメソポタミアを奪った。スレイマン 1 世の治世にハンガリーを支配し，三大陸にまたがる大帝国を建設するとともにプレヴェザの海戦において地中海の制海権も握った。(149 字)

解説

《オスマン帝国の成立と拡大》

今回の演習問題にもなっているオスマン帝国については，おおよそ教科書では絶対王政と呼ばれる時代の後ろに来ていることが多い。もちろんそれには正当な理由がある。この演習問題も本来はヨーロッパを学習することによって，オスマン帝国の強大さがより強くイメージされるはずなのだが，この問題の文章だけを読んでいると，数多くあるイスラーム王朝のワンオブゼムにすぎないといった認識しか持てないかもしれない。くれぐれも強調しておく。オスマン帝国はヨーロッパ世界を大きく脅かしたのである。バルカン半島一帯がイスラーム勢力の支配下に置かれたことは現代史にも直結する大事な部分である。年表に基づいて事実をしっかりと頭に叩き込んでもらいたい。

解答例には盛り込んでいないが，できれば黒海の制海権を握ったことも書きたかった。岡山大は字数がはっきりと決まっているわけではないので（この演習問題では便宜上制限字数を設定した），実際には書くこともできるのではあるが…。制海権を握ったことまで書く必要がないのでは，という考え方は正してほしい。陸にばかり目を向けてはいけない。領土の観念がまだないこの時代，陸と海をわけてはならないのは歴史学においては常識である。もちろん字数の少なさを考えたら，海のことは削ってスルタン名を入れていくのも手ではあろう。アンカラの戦いのことも省いたが，「拡大」ということに焦点を絞ったからであって，入れてもよいのだろうが，それには字数が少なすぎると思う。サファヴィー朝からメソポタミアを奪ったことに気づかなかった人もいるかもしれないが，三大陸にまたがる大帝国という表現を使うには書くしかない。このあたりを全部削ったら，スルタン名もアンカラの戦いのことも全部入るだろう。

＊別解＊

小アジアでビザンツ帝国に対し北辺防衛を行う戦士集団を起源に，1299 年にオスマン帝国が建国された。1389 年のコソヴォの戦いや 1396 年のニコポリスの戦いなどでバルカン半島に進出を強め，1453 年にはビザンツ帝国を，1517 年にはマムルーク朝を滅ぼして，16 世紀にはアジア，アフリカ，ヨーロッパの 3 大陸に領土を拡大した。(149 字)

解答例は，一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば，千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

W3J
東大世界史

Z-KAI

会員番号	

氏　名	

不許複製